

地域の物語に着目した住民協働事業への参画に関する研究

愛媛大学 学生会員 ○窪田愛実

愛媛大学大学院 正会員 羽鳥剛史

1. はじめに

近年、全国各地で地域の衰退が深刻な問題となっている。地域が衰退という危機に直面した時、そうした危機的状況を克服する上で、当該地域に住まう住民自身の自発的な取り組みによって地域の活性化を図ることが不可欠であり、地域住民自身による地域交流や地域イベント等といった協働的な取り組みを実施していくことが重要であると考えられる。

しかしながら、そうした地域協働事業を実施する上では、住民一人一人が相応の労力を負担することが必要となるが、地域住民がそうした負担を受け入れ、当該の協働事業に主体的に参加するとは限らない。

それでは、地域住民は、どのような協働的取り組みであれば、そうした取り組みを受け入れ、主体的に参加するのであろうか。本研究では、この点について、「物語」(narrative)に着目する。「物語」は、歴史学や心理学、社会化科学、経営学をはじめとする人文社会科学において、人間、あるいは、人間が織りなす社会の動態を理解するにあたって、重要な役割を担うものと見なされている。

こうした認識の下、本研究では、「地域の物語」に着目し、地域住民の協働事業への受容意識や参画意識との関連を実証的に検証していくことを目的とする。

2. 理論仮説

本研究では、既存の物語研究の知見を踏まえて、以下の仮説を措定した。

仮説 1 地域住民は、地域の協働事業が地域の物語と親和(一貫・類似・連続)していると認知する程、その事業を受け入れ、参画する傾向がある。

仮説 2 地域に対する愛着意識が高い人ほど、地域の協働事業を受け入れ、参画するかどうかという判断において、「地域の物語」と「地域協働事業」との親和性認知の及ぼす影響が強い傾向にある。

3. 調査概要

(1) 東雲公園未利用地を活用した地域協働事業の概要

松山市東雲町に位置する東雲公園は、戦後、育苗場

として利用されて以降、何十年もの間その一部が未利用地として使用されていない状態が続いており、地域住民から有効利用の要望が挙がっていた。そこで、平成 25 年度より、愛媛大学、松山市立東雲小学校、NPO 団体の協働の下、東雲公園未利用地を地域住民と子どもたちが共に野菜を育てるコミュニティファームとして活用する取り組みを開始することとなった。

(2) 調査対象者

本調査では、上述した仮説を検証するために、東雲公園周辺の住民から集団抽出法を用いて抽出し、104 名を対象にアンケート調査を実施した。調査対象者の属性の内訳は、男性 45 名(43.3%)、女性 59 名(56.7%)その平均年齢は 52.9 歳、標準偏差は 20.9 歳であった。

(3) 調査方法

本調査では、上述の地域協働事業に対する地域住民の受容・参画意識において、当該事業と地域に根付く物語との親和性認知がどのような影響を及ぼすかを検討するため、地域の物語として、松山市都市整備部公園緑地課、東雲公園にお住まいの方 4 名へのインタビュー及び、文献を基に「東雲公園のこれまでの歴史」に関する簡易物語を描写し、調査票の中に含めた。

(4) 調査項目

本調査では、上述した東雲公園未利用地で実施及び、検討している取り組みを調査対象事業とし、以下の 2 つの取り組みに対する受容・参画意識、地域の物語との親和性認知について測定した。なお、調査票では、以下の取り組みを「取り組み①」及び、「取り組み②」と記載した。

①東雲公園未利用地を子どもたちが農業体験することのできる畑として活用し、農作業を通じて自然や環境、食育について学ぶことのできる空間とする(以下、「地域協働事業 1」)。

②東雲公園未利用地を地域協働の畑として活用し、地域にお住まいの様々な方が交流できる空間とする。また、収穫した作物で防災用の炊き出し訓練を行ったり、収穫祭などの関連イベントを開催する(以下、「地域協働事業 2」)。

表 1 質問項目

地域協働事業 1 への受容・参画意識						
1) あなたは、「取り組み①」に賛成しますか。						
2) あなた自身は、「取り組み①」に積極的に携わっていきたいと思いますか。						
地域協働事業 2 への受容・参画意識						
3) あなたは、「取り組み②」に賛成しますか。						
4) あなた自身は、「取り組み②」に積極的に携わっていきたいと思いますか。						
親和性認知 1						
5) 「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」と調和した取り組みだと思う。						
6) 「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に則した無理のない取り組みだと思う。						
7) 「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に反する奇抜な取り組みだと思う。						
8) 「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に照らして違和感のある取り組みだと思う。						
親和性認知 2						
9) 「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」と調和した取り組みだと思う。						
10) 「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に則した無理のない取り組みだと思う。						
11) 「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に反する奇抜な取り組みだと思う。						
12) 「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に照らして違和感のある取り組みだと思う。						
地域愛着						
13) 「お住まいのまち」は、住みやすいと思う。						
14) 「お住まいのまち」にお気に入りの場所がある。						
15) 「お住まいのまち」を歩くのは気持ちよいと思う。						
16) 「お住まいのまち」では、リラックスできる。						
17) 「お住まいのまち」の雰囲気や土地柄が気に入っている。						
18) 「お住まいのまち」が好きだ。						
19) 「お住まいのまち」は、あなたにとって大切なと思う。						
20) あなたは、「お住まいのまち」に自分の場所がある気がする。						
21) 「お住まいのまち」にずっと住み続けたい。						
22) 「お住まいのまち」は、自分のまちだという感じがする。						
23) 「お住まいのまち」にいつまでも変わって欲しくないものがある。						
24) 「お住まいのまち」になくなってしまふと悲しいものがある。						
25) あなたは、「お住まいのまち」に愛着を感じている。						

注：1), 3) は「絶対反対」から「絶対賛成」の 7 件法、25) は「全く感じない」から「とても感じる」の 7 件法、それ以外の項目は「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の 7 件法で回答を要請した。

表 2 地域協働事業 1 に関する重回帰分析結果

(説明変数)	受容意識			参画意識				
	β	t	p	β	t	p		
親和性認知 1	.58	**	5.05	.00	0.30	*	2.31	.02
地域愛着	.02		0.17	.86	0.19		1.48	.14

* $p < .05$, ** $p < .01$

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 3 地域協働事業 2 に関する重回帰分析結果

(説明変数)	受容意識			参画意識				
	β	t	p	β	t	p		
親和性認知 2	.79	**	8.12	.00	0.49	**	3.73	.00
地域愛着	.09		0.95	.01	0.20		1.53	.13

* $p < .05$, ** $p < .01$

* $p < .05$, ** $p < .01$

その他、「地域愛着」、「個人属性」についても質問した。質問項目の内容を表 1 に示す。

4. 結果

(1) 親和性認知と受容・参画意識との関連

「受容意識」と「参画意識」を従属変数に、「親和性認知」、「地域愛着」を説明変数にして重回帰分析を行った。その結果を表 2, 3 に示す。これらの表に示すように、地域の協働事業と地域の物語が親和していると認知する人ほど、その地域協働事業への受容・参画意識が高い傾向にあることが認められた。以上の結果は、仮説 1 を支持するものと考えられる。一方で、地域愛着が地域協働事業への受容・参画意識に及ぼす直接的な影響は認められなかった。

表 4 地域協働事業 1 に関するグループ間比較

親和性認知 1				
	地域愛着低群		地域愛着高群	
受容意識	.44	**	.50	**
参画意識	.19		.30	*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 5 地域協働事業 2 に関するグループ間比較

親和性認知 1			
	地域愛着低群		地域愛着高群
受容意識	.57 **		.70 **
参画意識	.27		.44 **

** $p < .01$

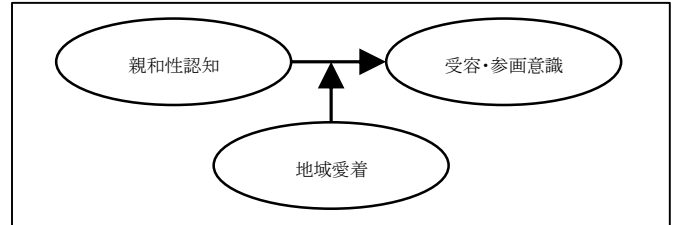


図 1 地域協働事業に対する受容・参画意識の心理プロセス

(2) 地域愛着が親和性認知の効果に及ぼす影響

調査対象者を、地域愛着意識の平均値で 2 分割し、「地域愛着低群」、「地域愛着高群」の 2 グループに分けて、「親和性認知」と「地域協働事業 1・2 への受容・参画意識」との相関係数を比較検討することとした。その結果を表 4, 5 に示す。この表に示すように、親和性認知と地域協働事業への受容・参画意識との相関係数は、「地域愛着低群」よりも「地域愛着高群」のほうが高い結果となり、親和性認知と地域協働事業への受容・参画意識との関連性が強い傾向にあるものと考えられる。以上の結果は、仮説 2 を支持するものと考えられる。

5. 結論

本研究により、図 1 に示す地域協働事業に対する受容・参画意識の心理プロセスが実証的に示された。

また、先行研究において、地域愛着が高い人ほど、町内会活動などの地域活動に熱心であることが示されているが、東雲コミュニティファームのような当該地域における新しい取り組みに関しては、地域協働事業への受容・参画意識に地域愛着が及ぼす直接的な影響は認められなかった。そのため、これまで実施されていないような地域協働事業を実施、導入する上では、地域の物語と地域協働事業との親和性認知が極めて重要であり、地域に根付いた物語に配慮して協働事業を進めることが大事であると考えられる。

参考文献

- 1) 藤井聡, 長谷川大貴, 中野剛志, 羽鳥剛史: 「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義, 土木学会論文集 F5, Vol.67, No.1, pp.32-45, 2011.
- 2) 鈴木春菜, 藤井聡: 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol.25, No.2, pp.357-362, 2008.